



名曲の向こう側

第7回

天才モーツァルトがただ一人尊敬してやまなかった同時代の先輩作曲家をご存じでしょうか？

時は1764年、8歳の「神童」モーツァルト少年は、父レオポルトに連れられてロンドンのバッキンガムハウスを訪問します。そこで、少年は運命的な出会いを果たしました。ヨハン・クリスティアン・バッハ（1735—82）——大バッハの末っ子で、イギリス王室の楽長をつとめていた人物です。モーツァルト少年の演奏に感銘を受けたJ.C. バッハは、その場で少年と即興のセッションを楽しみ、親子のロンドン滞在中、彼を親しく指導しました。

イタリアでオペラを学んだJ.C. バッハは、キャッチーなメロディーを紡ぎ出す才に長けていました。モーツァルトは、彼の流麗な音楽を好み、ピアノ・ソナタを協奏曲に編曲（3つのピアノ協奏曲 K.107）したり、彼と同じテキストでアリアの作曲を試みたりして、その魅力を大いに吸収しました。K.107の原曲となっているJ.C. バッハのソナタ（たとえば二長調 Op. 5-2とト長調 Op.5-3）と、モーツァルトの初期の同じ調性のソナタ（二長調 K.284とト長調 K.283）を較べてみると、非常に似通っていて、両者の間で受け継がれたものが「一聴瞭然」です。作曲家は、しばしば先輩作曲家へのオマージュとして、自作曲に旋律を引用したりしますが、モーツァルトの有名なロンド・二長調 K.485のテーマは、J.C. バッハの五重奏曲二長調 Op.11-6の第1楽章推移部でオーボエが奏でる印象的な旋律を引用したものです。モーツァルトは、父への手紙のなかでも、たびたびJ.C. バッハに言及して深い敬愛の念を吐露しており、マンハイム宮廷副楽長のフォグラーにJ.C. バッハの音楽をけなされた際には、「前髪をつかんで引きずり倒してやるうかと思いました」とまで書いています。

J.C. バッハは、1782年の元日、46歳の若さで急逝します。訃報に接したモーツァルトは、「音楽界にとってなんという損失でしょう！」と父への手紙に書きました。同年秋頃に作曲したピアノ協奏曲第12番イ長調 K.414では、第2

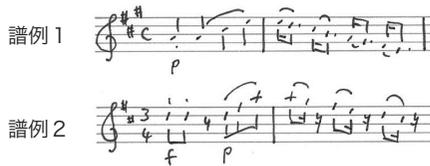
あの曲って、そういう曲だったの!? ピアニスト内藤晃が、思わず「へえ！」と唸ってしまう「名曲の向こう側」に皆様をご案内します。

モーツァルト / ピアノ協奏曲 第12番 イ長調 K.414

内藤 晃



左=モーツァルト、右=J.C. バッハ



楽章アンダンテの冒頭に、J.C. バッハのオペラ「心の磁力 La calamita del cuore」序曲の第2部アンダンテ・グラツィオーソの美しい旋律を4小節のフレーズ丸々引用し、追悼の想いを表現しました。ここで感動的なのは、モーツァルト自身による軽快な第1楽章第1テーマ（譜例1）が、第2楽章でも、J.C. バッハの旋律に続いて回想されるところ（譜例2）。私には、あたかもモーツァルトが「あなたが天国に行っても、僕の心はあなたとともにあります」と言っているように聴こえてならないのです。

参考文献=石井宏「反音楽史」新潮文庫、2010年

推薦盤：アンドラーシュ・シフ (P) シェンドール・ヴェーグ指揮カメラータ・ザルツブルク [DECCA]
ヴァイオリンの名匠ヴェーグ率いるカメラータ・ザルツブルクによる、この上なくデリケートな弦の響き！シフのベーゼンドルファーは、フォルテピアノのような質感で、エレガントな通奏低音や装飾とともに雄弁に語りかける。

内藤 晃（ないとう・あきら）
ピアニスト・指揮者・作編曲家。
「もっと深い音楽体験」への道案内をライブワークとし、独自の切り口による講座やレクチャーコンサートが好評。オーケストラの弾き振りも行う。「おんがくしつトリオ」主宰。



(イラスト=◎いとう まりこ)